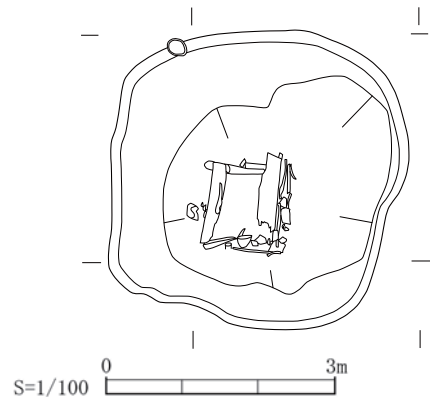


附章 市川橋遺跡 SE2010 井戸跡出土の古代土器

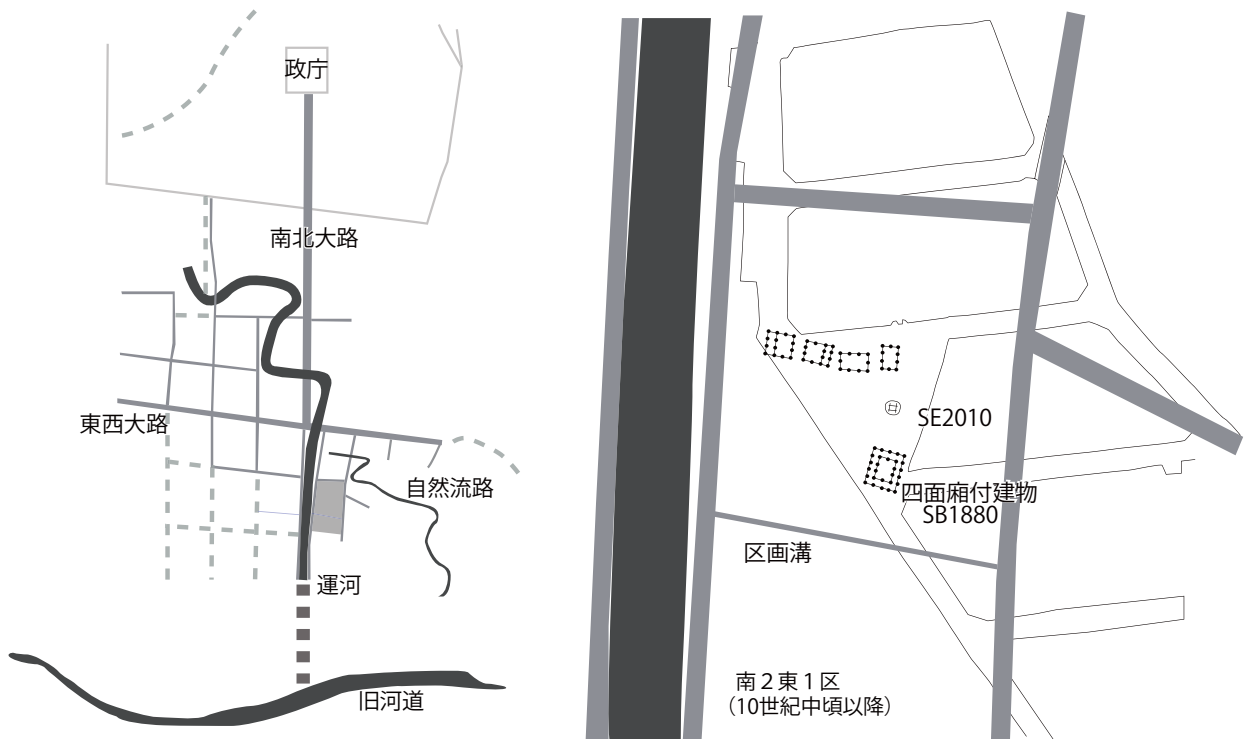
小原 駿平

1 遺構の概要

SE2010 井戸跡は、市川橋遺跡城南地区D区111Tで発見した横板組の井戸跡である。多賀城南面に広がる方格地割のうち、南2東1区に所在する（第1図）。本調査区については城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書（多賀城市教育委員会 2004）で既に報告済みではあるが、SE2010 出土遺物については、越州窯系青磁香炉を図示したのみで、井戸内堆積土及び抜取り穴から出土した在地の古代土器については未報告であった。同区画内では掘方埋土に灰白色火山灰を含む四面廂付建物 SB1880 及び4棟の東西棟が西向きに展開しており、SE2010 はこの建物群の中央に位置している。四面廂付建物を主屋として、一つの施設を構成していたと考えられる（村松 2010）。したがって、SE2010 出土土器は本施設の年代決定資料となる。本稿では、これらの土器を含め改めて出土遺物を提示し、井戸跡の年代と出土資料の意義について述べる。



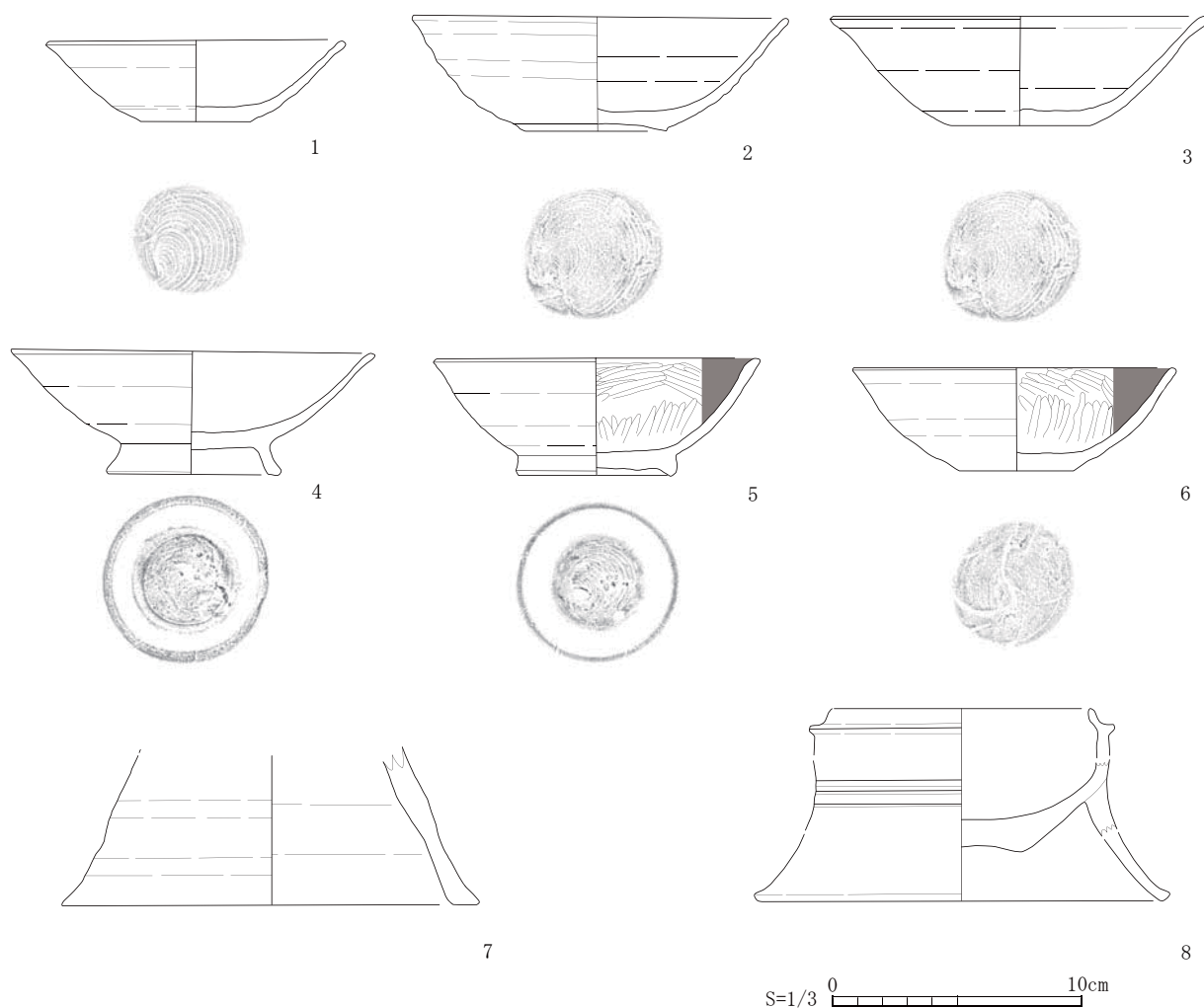
第1図 SE2010 井戸跡平面図



第2図 南2東1区模式図

2 遺物の概要

井戸内堆積土からは須恵系土器及び土師器が出土しており、須恵系土器では坏・小型坏・高台付坏・台付鉢が、土師器では坏・高台碗がある。抜き取り穴からは土師器坏・越州窯系青磁香炉が出土している。こ



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径	底径	器高	図版	登録番号	備考
				外面	内面						
1	須恵系土器 小型坏	SE2010	井戸内第2層	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り無調整	ロクロナデ	12.0	3.3	4.4	1-1	R-5552	
2	須恵系土器 坏	SE2010	井戸内第2層	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り無調整	ロクロナデ	15.0	5.6	4.6	1-2	R-5553	
3	須恵系土器 坏	SE2010	井戸内第2層	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り無調整	ロクロナデ	15.2	5.3	4.2	1-3	R-5554	内面に黒色付着物
4	須恵系土器 高台付坏	SE2010	井戸内第2層	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り→高台貼付	ロクロナデ	14.5	6.8	4.9	1-4	R-5550	
5	土師器 高台碗	SE2010	井戸内第2層	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り→高台貼付	ヘラミガキ→黒色処理	13.1	6.1	4.7	1-5	R-5555	
6	土師器 坏	SE2010	抜き取り穴	体部: ロクロナデ 底部: 回転糸切り無調整	ヘラミガキ→黒色処理	13.0	4.6	4.1	1-6	R-5538	
7	須恵系土器 台付鉢	SE2010	抜き取り穴	ロクロナデ	ロクロナデ	-	16.7	-	1-7	R-5501	
8	青磁香炉	SE2010	抜き取り穴			-	-	-	1-8		越州窯系

第3図 SE2010 出土遺物

のうち須恵系土器小型杯 R5552 は口径 12.0cm、底径 4.4cm、器高 3.3cm であり、口径に比して器高が低い。高台碗 R5555 は体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口径に比して底径が小さい。底部内面に放射状ミガキを施している。底部は回転糸切り後高台貼り付けである。外面に輪積み痕が残る。

3 出土遺物と遺構の年代

土器群全体を見ると、須恵系土器が主体を占め、土師器も一定量含まれている。須恵系土器が含まれることから、多賀城跡の土器編年のうち、E～F 群土器に当たる。

法量分化が不明瞭な小型杯 R5552 は、多賀城跡第 61 次調査第 7 層（宮城県多賀城跡調査研究所 1992）や多賀城跡城前地区 SK3127（宮城県多賀城跡調査研究所 2014）、市川橋遺跡第 14 次調査 SK565（多賀城市教育委員会 1994）で出土したものと共通している。これらは 10 世紀前葉頃の山王遺跡 SX543（多賀城市教育委員会 1991）や高崎遺跡 SX1080（多賀城市教育委員会 1995）よりも後出の資料である。

高台碗 R5555 は口径に対して底部が小さく、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。10 世紀前葉頃の高崎遺跡 SX1080 例や新田遺跡 SK2157 例（多賀城市教育委員会 2017）と異なり、10 世紀後葉頃の多賀城跡大畑地区 SX2449 例や SK2461 例（宮城県多賀城跡調査研究所 1998）に近い。山王遺跡多賀前地区 SE502 例（宮城県教育委員会 1996a）や多賀城

	高橋 2018	古川 2007
市川橋 SE2010	E2	F3
大畑 SK2461		
大畑 SX2449	F1	F4a
大畑 SX2319		
政庁 SK078	F2	F4b

第 4 図 10 世紀後半の土師器碗



図版 1 SE2010 出土遺物

跡鴻池地区第7層例に認められる深碗状の碗と同様、灰白色火山灰降下期の土器群よりも相対的に新しい段階で登場する。

また、多賀城跡大畑地区 SX2449 段階で一定量含まれる口径 10cm 前後の小型坏が全く含まれないことから、灰白色火山灰降下期の土器群と 10 世紀後葉頃の土器群の中間に位置付けられるが、高台碗の形態が SK2461 や SX2449 と類似することから、10 世紀中葉のうち、より新しい段階のものと考えておきたい（註）。南 2 東 1 区に成立した四面廂付建物を主屋とする施設群についても、およそ同時期のものとみられる。

ところで、近接する多賀前地区の様相を見ると、遣り水遺構を有する国司館が所在した南 1 西 2 区（B 3～B 4 期）は、前段階よりもかなり計画性の乏しい区画となっており、区画全体の性格が変化した可能性が指摘されている。同様に北 1 西 3 区（B 4 期）においても主要建物の抜き取り穴等に灰白色火山灰の堆積が認められ、多くの建物が火山灰降下以前に廃絶したものとみられている。一方で今回報告した南 2 東 1 区と運河を挟んで対岸の関係にある南 2 西 1 区（D 期）において、三面廂付建物や二面廂付建物を有する計画的な建物配置が成立している（宮城県教育委員会 1996b）。

以上のように、10 世紀前葉以降、東西大路から離れた区画において、前段階で認められなかった格式高い建物群が営まれていることが分かる。こうした空間利用の推移は、国衙機構の変質や城内官衙施設の消長と係るものと考えられる。方格地割を形成する道路網の変遷については、既にいくつかの研究がなされているが、今後は方格地割内における空間利用の変遷についても検討していく必要がある。

註 高橋編年では E 1 群（山王遺跡 SX543 etc.）と F 1 群（多賀城跡 SX2449 etc.）の中間に位置付けられる E 2 a 群土器の実年代について、多賀城跡第 21 次調査 SK473 で出土した平安京Ⅲ期古段階（960～980 年頃）に併行する近江産緑釉陶器皿から、10 世紀後半頃としている（高橋透 2018）。

参考文献

多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡―第 9 次発掘調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第 26 集

多賀城市教育委員会 1994『市川橋遺跡ほか―平成 5 年度発掘調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第 35 集

多賀城市教育委員会 1995『高崎遺跡―第 11 次調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第 37 集

多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ―』多賀城市文化財調査報告書第 75 集

多賀城市教育委員会 2017「V 新田遺跡第 115 次調査」『多賀城市内の遺跡 2―平成 28 年度ほか発掘調査報告書―』 pp. 30-50

高橋透 2018「陸奥国府域における 10 世紀の土器様相」『宮城考古学』第 20 号 pp. 187-206

古川一明 2007「IV. 多賀城跡の 11 世紀～12 世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2006』 pp. 72-79

宮城県教育委員会 1996a『山王遺跡Ⅲ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書―多賀前地区遺物編』宮城県文化財調査報告書第 170 集

宮城県教育委員会 1996b『山王遺跡Ⅳ―多賀前地区考察編―』宮城県文化財調査報告書第 171 集

宮城県多賀城跡調査研究所 1992『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』

宮城県多賀城跡調査研究所 1998『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』

宮城県多賀城跡調査研究所 2010『多賀城跡 政庁跡 補遺編』

村松稔 2010「多賀城外の方格地割り」『発掘調査からみた古代地方都市の諸要素』 pp. 30-42